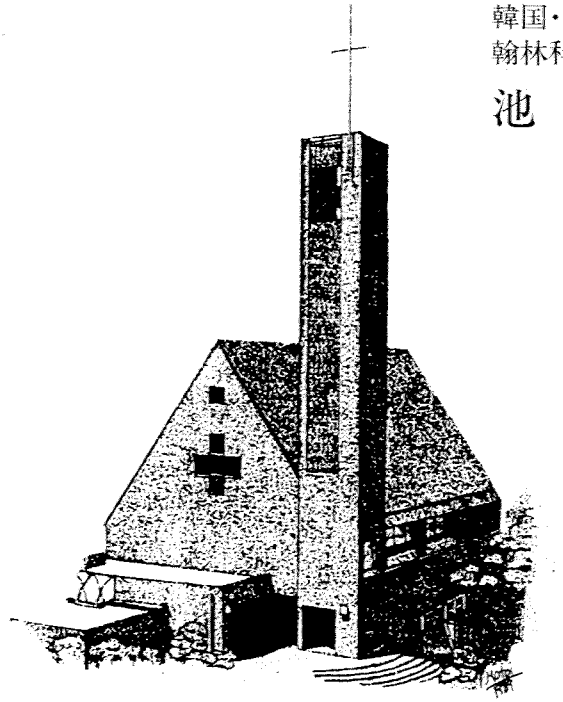
チャペル ブックレット No.9

―― 1996 創立記念日・記念講演記録 ――

日本におけるキリスト教主義大学の使命

―― アジア的コンテキストの中で ――

韓国・翰林大學校
翰林科學院日本學研究所所長
池　明観



名古屋学院大学　宗教部

池　明観　教授

ジ・ミョングァン教授は1924年のお生まれで、韓国・ソウル大学文理科大宗教学科を卒業され、同大学院で宗教哲学を専攻されました。徳成女子大学教授、ソウル大学文理科大講師、雑誌『思想界』主幹を経て、1972年来日。74年東京女子大学客員教授を経て、86～93年、同大学現代文化学部教授。1993年帰国。現在、韓国　翰林大學校　翰林科學院日本學研究所所長として活躍されています。著書に『アジア宗教と福音の論理』『韓国文化史』『現代史を生きる教会』『現代に生きる思想』『破局の時代に生きる信仰』『勝利と敗北の逆説』など多数がある。

目　　次

アジア的コンテキストについて ……1

大衆消費社会のただ中で ……6

未来の不確実性と現代人の不安 ……14

現代におけるキリスト教主義大学 ……15

名古屋学院大学創立記念日おめでとうございます。この非常に貴重な機会にお招きくださいましてありがとうございます。今まで何度かこの美しいキャンパスに招かれて楽しいひとときをあたえられました。今日はまた久しぶりにオルガン演奏を聴かせていただきましてとても感動いたしました。

アジア的コンテキストについて

私にあたえられました「日本におけるキリスト教主義大学の使命」という問題、しかもそれを「アジア的コンテキストの中で」語るということですが、アジアという非常に複雑な状況を考えますと、これは大変難しい課題です。

昨年、私共の研究所で開催いたしましたシンポジウムで、朝日新聞のアメリカ総局長、船橋洋一さんが主題のひとつを発表されました。そのなかで彼は「2010年頃にはインドネシアの国民総生産はフランスを超えるだろう、またタイはイギリスを超えるだろう。しかしそれは国民総生産が上がることで、その政治力文化力がヨーロッパの国々のそれを超えるというわけにはいかないだろう」というとても印象的な発言をなさいました。しかし今日はそういう経済的な観点よりも、アジアが現在どのような状況において苦悩しているか、またそれをキリスト教との関係で見ていきたいと考えています。

アジア的コンテキスト――のアジアですが、私はアジアは欧米よりもはるかに、これから国家という問題と取り組まざるを得ない状況にあると思います。アジアの諸国の多くはようやく1945年以降、独立を勝ちえた国々ですが、これからも「国家」という問題と取り組み、悩み続けるだろうと思います。そういう問題とわれわれはどう対応するか、その問題からお話ししましょう。

最近、私はノーベル文学賞を受けられた作家、大江健三郎さんとたびたびお会いしてお話しする

機会がありました。今、あらためて彼の初期の作品を読みなおしています。これから彼の全作品を読もうと思っていますが、私が全作品を読み終わった時、はじめて私の立場で大江さんに向かって彼の文学について語ることができるのではないかと思って楽しみにしています。

彼の初期の作品を読みながら、そのなかに既に将来ノーベル文学賞を受けるに値する巨大な芽があらわれていることに気がつきました。たとえば彼が23才のとき（1958年）著された『芽むしり仔撃ち』という作品があります。私はこれを読んで大江さんに手紙を書きました。まず「これを翻訳することは非常に難しい！」と書きました。なぜなら彼の文章はモザイクのように一句一句がキラキラと光りかがやいていて、そのニュアンスを翻訳して移すということが難しいのです。彼は自分の作品を「グロテスクリアリズム」と評していますが、それが全体の構成だけでなく、一句一句のなかでとぐろを巻いているような気がしてなりません。

実際に今、韓国でこれを翻訳しようとしていますが、これを外国語に翻訳することは至難の業です。ただ日本語と韓国語ができるだけではとうていできるものではありません。両方を完全にマスターして、なおかつ大江文学そのものをマスターした専門家でなければこれを翻訳することはできないと思います。私は大江さんに「あなたのイマジネーションがあまりにもすばらしく、ときには普通の人間には想像もつかないようなものなので、これを韓国語に翻訳することは難しい、難しいというより、不可能かもしれない」と書きました。この翻訳の難しさは「詩」を翻訳することが難しいのと同じです。しかしもし翻訳ができあがったら、そこには韓国語に新しい語域を与え、言語の領域を広めるような結果を生み出すはずです。

たとえば芥川賞を受賞した『飼育』という小説のなかにおける、子どもたちが草原で元気に遊んでいる場面の描写です。「押しつぶしようのない、むくむく動く情念が子供らの躰を魔法使の前ぶれ

の火の粉のようにばらばら弾けて駈けまわっているのだ――」という文章があります。これは日本語でも難しいと思いますが、これを韓国語に翻訳してそのイメージをあらわすことは不可能だと言わざるをえません。

私はもともと哲学を勉強した者ですが、彼の作品を読むのはまるで哲学書を読んでいるように難しいのです。ですからゆっくり読んでいきます。内容は決していわゆる面白いというものではないと言えましょう。しかし面白くないにもかかわらず、彼の作品にはものすごく引きつける力があるのです。なぜならば奇想天外な展開をしていくからです。先を読みたくてたまらないのです。「巻を措く、あたわず」です。私は他の勉強、他の仕事もしなくてはならないのに、本を閉じることができないのです。そんな経験をさせられました。みなさんのなかでお読みになっていらっしゃらない人は、ぜひ思考の訓練、感性の訓練のためにもお読みになることをお勧めいたします。

『芽むしり仔撃ち』は『飼育』に通じる内容で、1958年、若き大江健三郎が国家というものをどう考えていたかが克明に表れている小説だと私は思います。彼はそのなかに「人殺しの時代だった。永い洪水のように戦争が集団的な狂気を、人間の情念の襞ひだ、躰のあらゆる隅ずみ、森、街路、空に氾濫させていた――」このように書いています。イノセントな子どもたち、すなわち名もなき国民に大きな災難が降ってきます。「町を気の狂った大人たちが狂奔していたあの時代に、躰じゅうの皮膚がなめらかで栗色に光る生毛しかもっていない者ら、取るにたりない悪事をおかした者ら、なかには非行少年的傾向を持っていると判定されただけの者らを監禁しつづける奇妙な情熱があったということは記録しておくに足りるだろう」といっています。

作品のなかでそのように監禁された子どもたちは、ある村に疎開し、やがてその村に伝染病が流行ると言って村の人たちがみんな逃げていくので

すが、子どもたちはその群れに入れてもらえません。完全に排除されてしまいます。そして逃げていった村の人々は帰ってきて残虐を働き、脱走兵を殺害します。そして彼らは子どもたちに自分たちが逃げたことも悪事を働いたことも、すべてのいきさつを決して口にしてはならないと口止めをします。

狂気の時代における支配者たちは人々を抑圧し、残虐を働き、そしていざというときは逃げてしまう。しかし再び帰ってきては何も語れないように口止めし、自分たちの過去を当然なものとして美化しようとする。大江さんはこれが支配階層だ、これが即国家だと言うのです。その支配者たちは自分たちを国家であると自称してきたのですから。国家の問題をこのように圧縮してまざまざと提示した小説がまたとありましょうか。これが23才の大江健三郎の眼に映った国家であったのです。あるいは国家に対する彼の原体験であったと言えるのではないでしょうか。

大江さんが文化勲章を拒否したということの理由がこの作品ひとつでわかるではありませんか。彼はそういう国家がその正視に耐えないような姿に目を瞑って、歴史をゆがめ、美化しながら勲章を与える、自分はそれを貰うわけにはいかないという。もしもらえばたいへんな罪を犯すようなことになると思ったのでしょう。

今、若き大江健三郎の目を通し日本の国のことを述べましたが、これと同じ経験を現在アジアの諸国で人びとが経験していると私は言いたいのです。

日本は明治以降、近代化されるのですが、近代的国民国家を形づくる第一群としてまず走っていったのがイギリスとフランスです。そして約100年遅れて第二群のドイツ、イタリア、日本などが19世紀後半に走りだします。そういう国々にアジアは蹂躙され、ようやく1945年からアジアの方々でその抑圧から解放され、第三群としての近代国民国家をつくろうとする運動が展開されます。

それで日本がかってそうであったように先進国に早く追いつきたい、——Catching up，韓国語では短縮成長と言っています。短い期間に成長しようというのです。もし日本が100年の間に成長したとすれば、韓国は30年の間に成長しようというのです。ですから韓国、香港、台湾などいわゆるＮＩＥＳの国々が1960年頃から猛烈な勢いで走りだし、1980年頃から東南アジアの国々が走りはじめ、つぎつぎ続いて短縮成長の道を突っ走るのです。事実、そこには多くの無理が伴ったのですが、日本は1960年代あたりに近代化論者によって非ヨーロッパのなかで唯一近代化に成功した国家であったと高く評価されてきました。

1945年以降、1960年代あたりから大きく羽ばたき始めたといわれる第三群の国々、たとえば韓国を含めたアジアのいわゆるＮＩＥＳの国々や、その後1980年代あたりから頭をもたげる第四群、たとえばＡＳＥＡＮの国々などの現在の状況は、大江さんが『芽むしり仔撃ち』で描いた、かっての日本の姿そっくりなのです。「町を気の狂った大人たちが狂奔していたあの時代——」のなかにあって「皮膚のなめらかで栗色に光る生毛しかもっていないものら」純真でイノセントな者たちに対する抑圧と受難の時代——は始まっているのです。残忍な村の人々のような支配者たちが横行し、暴虐を働き、そうしながら口止めをし、自分たちの残虐な統治を正当化しようとし、完全に美化するという状況が続いているのです。

その顕著な例のひとつとしてミャンマーがあげられましょう。かって日本が経験したように、やがてミャンマーにも大きな動揺がやってくるでしょう。アジアはこのように大動揺を内に孕んでいるといえます。

今日もＴＶニュースで韓国と北朝鮮の間の潜水艦事件が報道されており、国連の議長声明が出されていました。この潜水艦事件は９月に起こり、その後、要するに殺し合いが続いたのです。私は1950年代の朝鮮戦争がまだ続いているような、時

計の針が逆もどりしたような気がして、非常な悲しみを持ってニュースを見ていました。このように韓国は民主化したといいながら、すぐ逆もどりしようとする傾向があります。

日本の近代国家建設も第二群としてはるか前に成し終えたにもかかわらず、日本にもまた戦前のメンタリティに戻ろうとする、引き戻されようとす強力な力が依然として働いています。

韓国では軍部が政治権力をもって非民主的に抑圧してきた時代に逆もどりしようとしています。民主化されたとは言いながら、いわば Fantasmagoria—亡霊とでも訳しましょうか、これが戻ってきて横行しようとしているのです。

このようにこれからアジアの諸国は国家を持っているがためのこの狂気的な病理、——私はこれを国家病理症候群と言っていますが、このシンドロームにこれから悶えるであろうし、その後遺症に悩まされ続けるでしょう。大江健三郎さんの言う『芽むしり仔撃ち』の時代——「町を気の狂った大人たちが狂奔していたあの時代」そして「躰じゅう皮膚がなめらかで、栗色に光る生毛しかもっていない者たちを監禁しつづける奇妙な情熱にみなぎっている」——そんな時代はアジアでは終わっていないのです。まだその盛りだと思うのです。そしてこれからも延々と続くのでしょう。そのなかでわれわれはいかに生きるかということを考えなければなりません。

大衆消費社会のただ中で

私は今アジアの、日本から見れば後進国といわれる国々における状況を説明したのですが、それでは日本はどうでしょうか。「芽むしり仔撃ち」の時代を先に走って抜け出したといえる日本は今大衆消費社会のただ中にあります。韓国も最近これに仲間入りしようと懸命の努力をしています。それはまたその大衆消費社会がもっているところの病理現象のなかにまた巻き込まれていくことを意味しています。

そこで私はヴァルター・ベンヤミンの『パサージュ論』を思います。この中にはベンヤミンが大衆消費社会とはこういうものだということを説明しているところが何箇所かあります。彼はナチスに追われてピレネー山脈を超えようとしましたが、スペイン警察からの強制送還の脅しにあって、1940年、48才で服毒自殺した天才的思想家です。

『パサージュ論』のなかで彼は19世紀のパリに注目し、「近代」（モデルネ）を「地獄の時代」と見なさざるを得なかったその近代の根源をパリに発見しようとしました。ナチスに追われている我が身を思って特にそう考えたのでしょう。その根源を見つめようとして『パサージュ論』を書いたのです。

そして私は『パサージュ論』を通して韓国ソウルを見ようとしています。ベンヤミンがパリを見た眼で、私は帰っていった自分の国のソウルを見ようとしているのです。ベンヤミンはパリを知るということ、パリを研究対象にするということは、結局ヨーロッパ全体あるいは近代そのもの、これから展開されていく歴史全体を知ることであると考えました。

そこで私はソウルを知るということは韓国全体を知ることであり、それだけではなく、近代化、国民国家を目指す第三群のアジアの他の国々、またこれから走りだそうとしている第四群の国々を理解する方法でもあるのだと考えるのです。ソウルはわれわれの研究の対象であるばかりでなく、研究の方法でもあるのです。この方法でアジアのほかの国々、またその目指すものをわれわれは知ることができるのです。この意味で私はソウルを見続けているのです。

ベンヤミンの『パサージュ論II』にある言葉を引用してみましょう。「ブルジョワジーの支配がひとたび不動のものになってしまえば、ものを考える者にとって、歴史の栄枯盛衰は、結局子どもが手にしている万華鏡以上の興味は引かないだろう。万華鏡を回すたびに秩序をもったすべてのものは崩れて新たな秩序をもつようになる」。

彼はすでに今日の大衆消費社会を予言していて、大衆消費社会をブルジョワジーが支配する社会だと言っているのです。それが一度打ち立てられると、不動のものになります。そうするとものを考える者にとって、すなわち知識人とって、歴史の栄枯盛衰は、万華鏡の中のシーンのようなものです。万華鏡を回すたびにひとつの秩序をもったものが現れ、それが崩れて、また新たな秩序が現れてくるという変化、それだけの興味しかないというのです。

そのような変化が「高度資本主義の支配的な意識内容および表象形式」です。みんなが「最新のもの、もっともモダンなものが持つセンセーション」という情緒によってあおられています。しかしそういう新しいものが次々あふれてきても、それは脈絡のない夢のようなもので、それに眩惑されている間に私たちは本質的なものをすべて忘却するよう強いられているのです。しかもそれは万華鏡に現れる絵のひとこまにすぎず、その絵の素晴らしさも本質的には同じものがもどってくるという永遠回帰だというのです。

それは女性のスカートの丈が長くなったり短くなったりすること、目まぐるしく変わる映画やテレビの新しいスターのようなものです。また車のモードが変化する程度のものです。昔から車のタイヤの色はは黒と決まっていましたが、最近フランスではこれではおもしろくないとカラフルなタイヤがでるようですね。これが消費文化というものです。

選挙も同じでしょう。今回、日本にまいりましたら日本は選挙の時期です。選挙で新しい秩序を作ると言っていますが、やはりくりかえしであるということを人々は知っていて興味を失っているという状況です。韓国は非常に政治的で、新しい政治に燃えるような情熱をもっていたといえる国ですが、先日ソウルの区長の選挙がありましたが、わずか23.4%の投票率でした。選挙民は「同じもの」に興味を失っているのです。これがアジアの近代化が目指して駈けていく方向なのです。

もうひとつベンヤミンが『パサージュ論V』に引用しているJ.ショード＝ゼーグという作家の言葉を紹介しましょう。19世紀のパリについて言っているのですが「銀行家とは、ひそかな盗みや暴利によって財を成した者であり、政治家は……裏切りの回数を重ねることで……高い地位を得る。実業家は慎重で巧妙なペテン師であり、……文士は……自らの意見や自らの良心をつねに売り出している。……ド・バルザック氏がわれわれに描きだす世界は、……泥沼である」。これが特にバルザックの作品のなかに登場してくる近代的パリジャンの姿であって、世の中で成功している者は盗み、裏切り、ペテン、良心を売った者であるというのですから、そこに描きだされるのはまさに泥沼です。

このような状況が近代化によって大衆消費社会へ移行した国々の姿ではなかろうかと思います。いま韓国でふたりの元大統領を獄に送って断罪しているのもこのような泥沼の状況を現しているものでありましょう。しかし彼らは犯罪を犯したと思うのではなく、犯罪をもっと巧妙に隠しきれなかったということを後悔しているだけです。ですからそこに懺悔もなければ告白もありません。これが現在のアジアの状況の縮図なのです。

私は今、モンタージュするように、いくつかの現実的状況を集めてみました。このごろの歴史研究は、原因、結果という因果関係の方法をつかうより、このようなモンタージュの方法をとることが多いのです。モンタージュをしてみると歴史がよく見えてきます。

そういうなかで明らかに次のような三つの病理現象をあげることができると思います。まず第一は反倫理、無倫理という病理現象です。人間はこういう空気のなかでは正常な生活ができないという本性を持っているのではないでしょうか。『パサージュ論II』のなかには、1933年版、ボードレールの詩集『悪の華』にアンドレ・シュアレスが寄せた序文があります。「悪の華は19世紀の地獄

である。しかしボードレールの絶望はダンテの怒りよりもはるかに激しい」というものです。人間はあきらかな不正を見たとき、まず怒ります。しかしどうにもならないと絶望し、やがて諦めるのです。諦念は憂鬱を生み出します。そしてそれが空気のように社会全体に充満します。私はこのメランコリーこそ現代的状況、特にアジア的状況だと思うのです。非常に重い憂鬱が霧のように立ち込めています。明るい希望なんてないのです。

私はソウルの街を歩いていて街の人々の表情から、話し声からそんな憂鬱の空気を感じざるをえません。かって韓国では軍部政権のなかで暴力的でまた腐敗した人々が上層を占めていました。それが1993年の民主化後、しばらく鳴りをひそめたように見えたのですが、今はそのほとんどが返り咲いています。このような返り咲きをみて、ふたりの元軍部出身大統領もいずれは釈放されて返り咲いてくるだろうというのが大方の見かたです。そして彼らが何千億円と蓄えたお金は行方不明ということで終わってしまうのです。

そういう状況に対して最初は怒ってもそれが絶望にかわり、諦め、最後は全部が憂鬱のなかに閉じ込められてしまうのです。これが病理状況だというのです。

もう一方民主化につくした人々――現在の大統領も野党の第一人者もみな民主化運動を戦い、投獄されたりして崇高な犠牲を払い、命がけで危険な峠を越え、現在を迎えているのです――彼らだけでも小さな光でもいいから灯し続けてくれれば、それは救いの星だと思いたいのです。しかしそうはいかないのです。これは興味深く、また恐ろしいことですが、その民主化勢力というものも頽廃してしまいました。なぜでしょうか。

ベンヤミンの「ボードレールにおける第二帝政時代のパリ」という文章があります。ナポレオン3世の時代のパリについて書いているのですが、「ラ、ボエーム」という一種の浮浪者について述べています。1848年にクーデターによって権力を

握ったナポレオン3世の勢力というのはそのようなラ・ボエームで「陰謀家」であったというのです。彼らは政権を奪うためにあらゆる陰謀を企んできました。だから「職業的陰謀家」だというのです。そうやってナポレオン3世は皇帝になった後も、「不意打ちの布告、秘密主義、突然の攻撃、腹の底を見せない皮肉などが、第二帝政の国是をなして」いたというのです。

マルクスは彼らは火炎瓶などによる攻撃、暴動、不意打ちや偶然によって権力をうばうことに成功したのであって、労働者を啓蒙したり、階級意識にめざめさせることは深く軽蔑していたというのです。だからできあがったものはまるで浮浪者が権力をにぎっている状態だったということでしょう。

このような説明を、韓国のかっての民主化勢力、特にその政治勢力に適用することはやや苛酷に過ぎるでしょうか。軍部政権の暴力的支配と戦うためには民主化のための政治勢力も同じように陰謀、不意打ち、欺瞞、裏切りをせざるをえなかったでしょう。徹底した秘密主義を使い、必要なときは暴力も辞さなかったと言えます。そして革命後すなわち民主化後、目指していた民主化という気高い理念がなくなると、その「方法」のみが残ってしまったのです。

聖なる理念を喪失したある時代の教会もそうであったと思います。キリスト教会が神のために献身するという偉大な精神を失ったときに残るものは教会内の見苦しい戦い、泥まみれになった権力闘争のみだったのです。

今あらためて私は暗い時代を経て、民主化によって、たとえ近代国家として生まれ変わっても、憂鬱な心情を起こさせる空気はそんなに簡単に一掃されるものではないという辛い経験をしています。

政治哲学者、ハンナ・アーレントの言葉を思い出します。彼女はすでに1950年あたりから、すべての革命は失敗に終わったと言っています。革命が成功しても、今まで目標としていた高い理念が

なくなって、あとは内輪における熾烈な闘争のみが残ったという事実を指し、すべての革命は失敗だったと言えるというのです。韓国において今我々もそう考えざるをえません。それはまたマルクスが言っているような「理論的啓蒙教育」で解決できる生易しい問題ではないのです。

アジアの政治的民主化は必ず達成されなければならないのですが、その後にこのような頽廃が現れてくることにどのように対応すべきでしょうか。ロシアにおける民主化後の状態のようになるはずですが。

ハンナ・アーレントは『革命について』のなかでアメリカが民主主義的生活のなかで独立を要求するようになり、独立後も民主主義的生活を踏み外さなかったことを高く評価しました。フランス革命とはここが違うのです。フランスは革命の前にはそのような民主主義的訓練ができていなかったのです。

いずれにせよ今アジアには非道徳的な憂鬱な空気が瀰漫し国民の魂を蝕んでいます。

第二の病理現象として挙げたいのは競争です。独裁政権下ではある意味では人間の欲望は押さえられていますが、それが自由になると欲望が解放され、そのなかで手段を選ばない競争原理がすべての営みを支配するようになります。

これについてテオドル・W・アドルノが『ミニマ・モラリア』という名著のなかでこう言っています。「利害の追求や計画の実践につとめる人、つまり世間流に言って実際活動の場に身を置いている人は、接触する相手を自動的に友か敵に選り分けてしまう」。相手を友か敵に選り分けることによって他人との関係が貧しくなります。考えてみれば企業における人間関係もそうです。敵か味方か、企業にとってプラスかマイナスかを選り分けるのです。我々が関係する大学でさえそうです。

人間は自分と違うもの、自分に反対するものを包み込むことによって、「自分自身を超える可能性」を発展させることができます。自分と違うもの

のをみんな排除していってしまうと、自分がますます貧困になるのではないかとアドルノは現代人の貧困を指摘したのです。

韓国は長い間、敵と味方に分かれて戦ってきた国です。日本統治時代には日本に肩入れする人と、それに抵抗する人がそれぞれ敵、味方となって戦ってきました。その後、南北朝鮮に分かれると五十年以上、常にお互いを敵とみなしてきました。私はこれはほんとうに惨めな状態だと思います。

またアドルノを引用しますが、このように敵と味方、白と黒とに分ける発想は、まるで幼児の発想であるというのです。なぜなら幼児は好きなものと恐いもののふた通りに分けることしか知らないからと言います。友と敵、白と黒、このような選択の「圏外」に出るのが本当の自由というものであるとも言っています。そのようにすべての人間を友と敵に分ける発想が実はナチスへの道だったのです。

私は同じアジア人として日本の保守化を憂えるのもこのようなメンタリティを憂えるからです。自分と他者、日本と他の国を分ける発想、しかもこの発想が幼児的な発想だからでしょうか、若い人々には簡単にしみ込んでいくようです。自分はよし、相手は悪い、または関係がない、だから排除しなければならないという二分法的な考えかたです。それによって人間は貧しくなっていくのです。

現代社会そのものがそのような二分法にまったくとりこになっていると言えましょう。企業では人を選ぶとき、その企業に利益になる者とそうでない者に選り分けます。大学もまたそうです。よいものと悪いもの、勝つものと負けるものに分ける。これは非常に病的な状態だと思います。

韓国に目をもどせば、日本の支配下にあったときからずっと長い二分法的思考で生きてきたわけです。これによる病理現象が深くしみ込んでいると言わざるをえません。それにもかかわらず、健全な精神、良識と批判精神が残っているとすれば、私たちはほんとうに人間精神のしたたかさに希望

を抱くことができるのではないでしょうか。
大学はそのような現代に対して、ＮＯと言い続ける場所ではないでしょうか。そしてそれを言うことのできる人間を育てなければならないと思うのです。

未来の不確実性と現代人の不安

三番目の病理状況は未来に対する不確実性とそれによる精神的不安です。現代においては理想的未来、素晴らしい未来社会があらわれるという夢はもう消えたと言えます。革命は現実的に不可能というだけではなく、思想的にももう受け入れ難くなりました。それに現代社会特有の不可解性があります。ベンヤミンは『パサージュ論III』でポール・ラファルグの言葉としてつぎのような一節を引用しています。
「近代の経済発展の全体は、資本主義社会を次第に巨大な国際的な賭博場に変えていく傾向をもっている。そこではブルジョワは彼らには決して知られない出来事のために儲けたり、損をしたりする。……＜不可解なもの＞が賭博場におけるのと同じようにブルジョワ社会でも君臨している。……予期されず一般には知られない、見た目は偶然によると思われる原因のために成功や失敗が起こるので、ブルジョワはギャンブラーのような精神状態になりがちである。……資本家はその財産を株式に投資するが、その株価と配当の上がり下がりの原因は資本家には分からない。こうした資本家はプロのギャンブラーである」「ちょうど自然における不可解なるものが野性動物を取り巻いているように、社会的な事柄に関する不可解なものがブルジョワを取り巻いている」。
まるでジャングルのような社会です。賭としての人生、賭としての歴史と言っていいのかもしれません。昔は小さなお店を持つにも孫の代までかかると言われていましたが、今は若い人が偶然と冒険でにわかに大金を手に入れ、小さなお店どころか巨大な会社を持つようなことがあります。

以上のような社会的病理現象が不可避的に起こっているわけですが、その真っただ中で私たちはキリスト教主義大学の意味を問わなければならないと思います。

現代におけるキリスト教主義大学

このような三つの現象をお話ししましたが、そのなかにあって、一体、キリスト教主義大学は現代、どの方向に進むべきでしょうか。
現代社会が多様性をもっているがゆえに、私はキリスト教主義大学も、あるひとつの方向に集中するのではなく、多様性に対応しながら生きていかざるをえないと思います。基本的にキリスト教と大学教育は同じ課題の前に立たされているといえます。共により豊かな人間、より豊かな共同体を求めるのですから。その意味でキリスト教主義大学は二重の意味で同一の課題を背負わされていると言えそうです。不確実性の時代をどう生きていくか、賭としての人生という状況に対応できる人間をどう教育するか、敵対・競争のなかを生きる人間をどう育てるかを考えなければなりません。

これに対して聖書のみ言葉から三箇所を選んで考えてみたいと思います。
まずマタイによる福音書11章28節に「すべて重荷を負うて苦労している者は、私のもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう。……わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」とあります。これは世の中の煩いから離れることが大切だと言っているのです。世の中の価値判断基準から離れれば、魂が安らかになると言われるわけです。ここに真の学びが可能になり、真の豊かさが与えられるというのです。キリスト教主義大学はたとえ短い時間でも世の中のわずらいから、世の中の価値基準から離れることができる場所でなければなりません。
先ほどのアドルノの『ミニマ・モラリア』のなかに「水の上」という項目があります。そこで解

放された社会とは「人間としてのさまざまな可能性の実現とか、豊かな人生」を意味するのではなく「何かしていなければおさまらないような熱病に集団ぐるみとりつかれること」から解放されたものでなければならないといっています。数量的思考とか競争の脅迫観念から離れてのびのび暮らすことです。国民所得とか世論調査などのソロバンはじきは数量的思考、競争の強迫観念からくるものといえます。「せかせか動き回ったり、計画を立てたり、我意を通したり、ひとを隷属させたりする」ようなことをしてはならないとアドルノは言います。極端な表現を使えば人類は――先進国の場合ですが、歴史上始めて衣食が足りているのですから、水の上に寝そべり、満ち足りて天を仰ぐような生活をすることが解放だというのです。「エデンの園」におけるようにただ存在しているだけという状態が解放です。現代人の目からすると怠惰の礼賛であるとも言えますが。

私はここにキリスト教と大学が共通にもっている、またキリスト教主義大学が二重にもっている意味があると思います。それは世間でいう自由とは違います。そこでは水の上に寝そべるように無駄なこともするし、怠けることもするのです。金銭でものごとを考えるのではなく、またTime is money.と考えません。余裕のある大学キャンパスをめざして、実生活では少しも足しにならないように思われがちな哲学、芸術、宗教にも耳を傾けます。利益社会から離れるという意味で超世間的です。そこは脱現代、超現代の場です。しかしそれでこそ豊かになれるのです。それは世間でいう物神的な豊かさではありませんが、そのようなほんとうの豊かさがなければ人間は生きていくことが難しくなり、はち切れてしまうのではないでしょうか。はち切れないで生き残ったとしても、豊かな人間性を期待することはできません。

またキリスト教主義大学は癒しをあたえる場所でなくてはなりません。金銭でものごとを考え、Time is money.という実益社会から傷ついて帰ってくる人々に薬と包帯と安らぎを提供しなくて

はなりません。

二番目に挙げます聖書のみ言葉はマタイによる福音書10章16節です。イエスは12使徒を遣わすときに「わたしがあなたがたをつかわすのは、羊をおおかみの中に送るようなものである。だから、へびのように賢く、はとのように素直であれ。」とおっしゃいました。「狼の中に羊を送るようなもの」というみ言葉にはこの世の厳しさに対するリアリズムがにじみでています。

キリスト教主義大学は無風でぬくぬくとして厳しいところのない「エデンの園」であるだけで終わってはなりません。その空気のなかで「蛇のように賢く」あらなければならないのです。現実を生きる力、現実に仕える能力として、とぎすまされた知性と豊かな知識を身につけなければならないと思います。しかしまた「鳩のように素直」であることを忘れてはなりません。素直で暖かいハートが不可欠なのです。「蛇のように賢く、鳩のように素直」ということは現実を包みこむことのできる人格をいうのです。知的であって知に偏らない、情的であって情に偏らない、知的に情的に共に豊かな人格を指しているのです。

再びハンナ・アーレントに登場していただきましょう。彼女はその教育論において現代教育の幼児化現象を憂い、教育を子どもに任せることは子どもを専制の権威、多数の専制に任せることであると考えました。つまり子どもに任せるということはその幼児的なところに自主性を与え、権威づけてしまうことです。そこでいじめなどが起こるわけです。教育の本来的な姿は経験のある大人・教師とまだそこに達していない子ども・学生とが共に教育を営むことです。アーレントは教育方法を重視して、深い専門知識を身につけていないで教育にあたることに警告を発しました。そして遊びながら学ぶという考えを批判してplayとworkは違うということを強調し、仕事と勉強は共にwork であって、教育は大人への道であるから、work の厳しさに耐えるように訓練していくべき

であると言いました。勉強するということは play と言わないで work と言うではないか、われわれはプレイする状況からワークする状況に入る、これは全く違った状況に厳しい態度で入っていくということである。これが仕事であり、勉強であると言っています。

そして、そのすべてを越えて、あるいはすべてを包んで教育は愛であるということを強調しています。愛するがゆえに彼らを大人の世界から追い出すことしないとともに、また彼らの手から新しいこと、大人の私たちが予見できない何かを企てる機会を奪わないとアーレントは言うのです。そこで教育の場は「彼らをして共同の世界を革新する仕事のために前もって準備するようにする」場所として位置付けられなければならないと考えたのでした。

蛇の様な賢さと鳩のような素直さとはこのようなことだと思います。キリスト教主義大学のあり方はこういうところに求められるべきでしょう。

私が選びました聖書の三つのみ言葉のうち、最後はマタイによる福音書24章36節「その日、その時は、だれも知らない。天の御使いたちも、また子も知らない、ただ父だけが知っておられる」です。これは終末の日についてのイエスのみ言葉ですが、今日私たちは歴史、または未来の不確実性を前にしてこのみ言葉をかみしめなければなりません。キリスト教は明日のことは人間には分からない、神だけが知っているという、歴史に対して基本的に不可知論をもっているのです。

近代思想は、まさにマルクスの思想で代表されるように、未来は知ることができるというものでした。しかもその未来は人間の力で創ることが可能で、それを目標として揚げ、その目的のために有効であればどのような手段を使ってもよいと考えました。目的が正しければ暴力、策略、偽瞞、裏切りなどどんな手段も正しいとされたのです。

ハンナ・アーレントは、このように目的を設定して手段を動員することを do であるとして拒否

します。そして act という手段を正当視して生きる、まず今という時を忠実に生きることをすすめました。今を忠実に生きていれば、未来は与えられるというのです。人間が傲慢にも目的を設定して、人間を強制するのではなくて、私たちが今、この瞬間を忠実に生きていればすばらしい時代があらわれる、そういう時代は神から与えられるというのです。「その日、その時は、だれも知らない」神だけが知っているのです。東洋的な言葉で言えば「人事を尽くして天命を待つ」という心情でしょうか。

これはまた、マタイによる福音書25章35節以下の「……わたしが空腹のときに食べさせ、かわいたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、裸であったときに着せ、病気のときに見舞い、獄にいたときに尋ねてくれたからだ」という生き方です。今日の必要に答えてやることです。

私は最初にいまアジアの状況は非常に複雑で、メランコリーが支配していると言いました。しかしこのなかにあって私たちが今なすべきことを忠実になしていくことが大切で、そうすれば良い未来が与えられるのです。

キリスト教主義大学はこの不確実の時代において、この不合理と矛盾に満ちた社会において、このように生きる倫理的実践力を励まし養う場所であるといってよいのではないでしょうか。

アーレントが言っている言葉ですが、考える(think)という言葉は感謝する(thank)という言葉と起源を同じくしている。私たちは思索をしなければなりません。たとえ自分が成しうることが非常に小さくても、あるいは真っ暗闇に置かれているようにみえても、私たちが深い思索(think)の人であるかぎり、生きることの意味を発見して、そして感謝(thank)するようになるのだというのです。

その意味でキリスト教主義大学は「思索する場所」であり、「感謝する場所」であるといえましょう。

アジアにたちこめるメランコリーの霧が濃ければ濃いほど、時代が暗ければ暗いほど、キリスト教主義大学に要求されるものは大きいと私は思うのです。

●既刊

No. 1　経済の論理と人間の論理
エコノミック　アニマル日本
恵泉女学園大学教授　塩沢　美代子

No. 2　心を問い続けて
北海道家庭学校校長　谷　昌恒

No. 3　国際化時代におけるキリスト教の使命
韓国の視点から
梨花女子大学教授　徐　洸善

No. 4　激動する現代史と神のみことば
東京女子大学教授　池　明観

No. 5　生きることの感動
豊島岡教会牧師　金　纓

No. 6　生きるよろこび
フリーアナウンサー　村田　佳寿子

No. 7　心を支えているもの
西片町教会牧師　山本将信

No. 8　主の愛この眼にありて
名古屋大学教授　武岡洋治

No. 9　日本におけるキリスト教主義大学の使命
アジア的コンテキストの中で
韓国・翰林大學校
翰林科學院日本學研究所所長　池　明観

チャペルブックレットNo.9

１９９７年３月31日発行

編集・発行　名古屋学院大学　宗教部
〒４８０－１２
瀬戸市上品野町１３５０
TEL０５６１－４２－０３４８

印　　刷　泰光株式会社